

板門店訪問記

2003年11月14日（金）から11月16日（日）にかけて、東京、大阪、神奈川の社会保険労務士の有志20名で、韓国の日本大使館と公認労務士会を訪問し、板門店の見学を行った。

表敬訪問した韓国日本大使館では韓国の労働事情を中心にお話を伺い、公認労務士会ではあらかじめ質問事項を整理した質問状を基に、韓国公認労務士会と日本の社会保険労務士会との交流を主な目的として、それぞれの実情と労働関連法規の類似点と相違点や公認労務士として関与出来る範囲、又保険制度の取扱いの実情や加えて電子申請の状況等、時間が足りない位活発に意見を交換させて頂いた。内容は月刊社会保険労務士に記事として掲載される事になっているので、併せてご購入いただければ幸いに思う。

その日は朝から曇り空で、小雨が降っていた。
企画の第2弾として今日は板門店を見学しようという事になっていた。通常バスツアーとなるとチャーターしたバスで出かけるのが普通だが、昨日使ったバスは板門店を専用に案内するバスの乗り場までしか行かなかった。そこからは板門店迄の往復と板門店地帯を専門に案内する専用バスと専門バスガイドがついての移動であった。

前日パスポートだけは“忘れないで持参せよ”服装はジーンズや半ズボン、ミニスカートや派手なものは一切ダメです、会話も必要最小限にせよ”との注意があった。意味が良く理解出来なかったが、後で分かった。身分関係をきちっとチェックする為と相手国に不必要な刺激を与えることを禁じる為に必要であったのだった。

板門店はソウルから北西方面に約62kmの所にある。
ここは公式にUN軍（国連軍）と北朝鮮の共同警備区域「Joint Security Area」と呼ばれていて韓国と北朝鮮の間、行政管轄権の及ばない特別な場所である。

ここで少し北緯38度線の説明をしておきたいと思う。
1941年12月8日に始まった第二次世界大戦は連合国軍の大勝利に終わり、1945年8月15日に終戦を向えたことは皆さんご存知のとおりである。親子、兄弟、親類縁者等のつながりをも絶ち、同一の民族が互いに争い憎しみ会うという状況をもたらした悲劇の境界線38度線は朝鮮民族（韓国では韓民族というが）の意思とは全く関係なく、当時の大国の都合によって設けられたものであった。

米、英、中の三大国による 1943 年 11 月 22 日からのカイロ会談では第 2 次世界大戦終結後には、朝鮮半島をひとつの独立国とすることが決定されていた。その後、米、英、ソでの 1943 年 11 月 28 日からのテヘラン会談、1945 年 2 月のヤルタ会談で、日本の降伏を早めるためにソ連の対日戦争に参戦することが決定され、1945 年 8 月 8 日の夜、突然にソ連が日本に戦線を布告し、ソ連軍は満州に侵略し、一部は朝鮮半島にも進出した。終戦の 8 月 15 日には朝鮮半島東北部方面を制圧し、ソ連軍が確固たる地位を占めていた。

一方、米軍は朝鮮半島から 1000 km も離れた沖縄に駐留していた。そこでアメリカはソ連軍が朝鮮半島全島を占領するのを抑制するためと、日本軍の武装解除の境界を設ける必要から、その境界を北緯 38 度線としてソ連に提案し同意を得たのである。したがってこの 38 度線は臨機の処置としての軍事境界線であったのだが、38 度線に侵攻したソ連軍はこの線を恒久的な境界線と解釈して、嚴重な警戒網を張り、南北の交通や通信を遮断してしまった。

このように 38 度線は信託統治に移行するための軍事的、一時的なもので過渡的なものと考えられていたのだが、この頃米ソ対立が表面化していたこともあって、その対立の影響を受け、政治的なものへと急激に移行して行ったのである。

1945 年 9 月 8 日、米第 24 軍団先遣隊が沖縄より仁川（インチョン）に到着、自由と民主主義を旗印に軍政が布かれ、戦後の混乱の防止から日本の統治の方法を踏襲した。一方 38 度線以北ではソ連軍の軍政が布かれた。

ソ連軍は米軍政と違い日本統治時代の政治勢力とその機構を一掃することを目的としていた。しかもソ連軍は行政の表面に民族指導者を立てて、人民の反発緩和政策を取りながら急速な共産化を押し進め、反対分子を徹底的に排除した。特にソ連帰りの朝鮮人を平壤に送り、金聖柱に抗日戦の「白頭山の虎」として伝説的な英雄であった金日成を名乗らせ、北朝鮮人民委員会の委員長にすえた。

1945 年 12 月に戦後処理を討議するため、米、英、ソによるモスクワ外相会議で、カイロ宣言による米、英、中、ソの 4 ヶ国による 5 年間の信託統治を行うという、いわゆる「モスクワ協定」が成立したのである。その間、臨時政府の樹立問題で米、ソ合同委員会が設置され、1946 年 1 月第 1 回のソウル合同会議が開催されたのであるが、朝鮮人民の代表参加問題で最初から対立し、休会となってしまった。

1947 年 5 月に第 2 回目が開かれたのだが、意見一致を見ることが出来ずに、結局アメリカは国連総会に提訴した。1947 年 11 月の国連総会では、

- ①1948 年 3 月 31 日までに南北統一選挙を実施すること
- ②その選挙の執行と監視のために国連臨時朝鮮委員会を設置すること

③国民政府樹立後 90 日以内に米ソ両軍は朝鮮半島から撤退すること。

以上 3 点が決議されて、インドを代表とする 8 ヶ国の国連臨時朝鮮委員会が設置され、具体的に行動を起こした。

ソ連軍司令官は同委員会の 38 度線以北の入域を認めず、朝鮮半島における統一選挙は事実上不可能となったのである。そこでこの問題は国連の小委員会に移され、1948 年 2 月全朝鮮での統一選挙の実施が不可能ならば可能な地域である 38 度以南の地域だけで実施するようという勧告案が可決された。ただこの選挙で選出される代表は国連臨時朝鮮委員会の単なる諮問機関との制限規定であったのだが、38 度線以南での分離選挙が実施されることによって、38 度線の本来の意味は変質し、悲運にも国境線化していくのである。

1948 年 3 月国連臨時朝鮮委員会は、5 月に 38 度線以南で総選挙を実施すると発表、金九、金奎植らに代表される重慶臨時政府系の人々は、南北統一と自主独立を主張して反対していたのだが、予定通り選挙は実施され、5 月には第 1 回の国民会議が開催、7 月に憲法が制定され、李承晩を大統領に選出して、1948 年 8 月 15 日「大韓民国」として独立した。しかし野党はことごとく李承晩と対立、左翼の過激行動や済洲島の暴動、反政府議員の逮捕、金九暗殺事件、共産ゲリラの活動や 38 度線をめぐっての紛争事件など国内は不安定、騒然の状況が続いていた。

一方 38 度線以北は 1948 年 4 月 29 日、北朝鮮特別人民会議で憲法を採択し、「朝鮮民主主義人民共和国」が成立。金日成が首相となり新政府が樹立された。表面的には安定を見せてはいたものの基盤は不安定で、派閥間の権力闘争が繰り広げられていたのだが、金日成政権はスターリンの強力な支援のもとに勢力を確立し、拡大をしていった。

国連は「大韓民国」を 1948 年 12 月 12 日の総会で朝鮮半島における唯一の合法政府として認定したものの、人民と領土を実効的に支配する政府が 38 度線以北に現存していることは事実であった。しかも国連の朝鮮委員会は北朝鮮側と交渉を持つことが出来ずに、何らの成果も得られなかったことも事実である。

ソ連軍は 1948 年 12 月に約 3,000 名の顧問団を残し、38 度線以北の地域から撤退、また米軍も 1949 年 6 月に約 500 名の顧問団を残して 38 度線以南の地域から撤退した。これで一応落ち着いたかに見えた。

1950 年 6 月 25 日早朝 38 度線に勢ぞろいした北朝鮮軍は、韓国民が初夏の薫風をめでているときに、韓国軍の寝込みを突如襲って怒濤のように 38 度線を越え南下し

た。いわゆる朝鮮戦争（韓国では韓国戦争という）の勃発である。以後 3 年 1 ヶ月あまり 19 カ国が参戦し激烈な戦いがくり広げられていくことになったのである。こうして不意に突如として勃発し、韓国民 2 千数百万人を一瞬のうちに戦火のルツボに投げ込んだのである。

奇襲を受けて無残な敗退をくり返した韓国軍の敗因とその実態、不意を衝かれ無準備のまま参戦し、敗退を重ねた国連軍、土壇場の釜山橋における血戦、洛東江の攻防戦、仁川上陸作戦と国連軍の反攻及び北進作戦、韓国に残された侵略者の爪跡、中共軍の突然の参戦と再度の侵入、雪中での国連軍の再反攻そして休戦会談へと朝鮮戦争の詳細は他の資料で参考にしていただければ幸いと思う。

この 38 度線は朝鮮半島の人民にとって戦争体験を通しての分断の歴史的事実なのである。

板門店は 1951 年の国連軍と共産軍との予備の休戦会談から始まる。当時の休戦会談の場所は、現在の位置から北側 1 キロの所にあり 3,4 棟ほどの藁ぶきの草屋と 2,3 棟の組立式宿舎で、現在地からも見る事が出来る。板門店という名前は、会談場所のすぐ近くにあったタバコ屋を兼ねた店を中共軍の代表連が、会談に参加する際に捜しやすくするために、漢字で標記した事が始まりであると、ガイドから説明を受けた。

休戦会談は 2 年 1 ヶ月に 1000 回以上も話し合われ、1953 年 7 月 27 日 UN 軍と北朝鮮中共軍との間について休戦協定が結ばれたのである。この板門店は現在非武装地帯の中にあり、唯一南と北の対話が出来場所となっており、東西冷戦の緊張と対立の歴史現場として、朝鮮民族の分断の歴史を証言しているところでもある。

板門店は停戦協定の締結後現在の所に移されたのであるが、実際 UN 側と北朝鮮側の共同警備区域と定められた所は、前後左右わずか 800 メートルの狭い場所である。

現在 UN 側と北朝鮮側が各自 6 カ所で警備所が設置運営されており、各々 35 人で構成された警備兵がサングラスをかけ、拳銃を腰にぶらさげて物々しく警備にあたっていた。UN 側の建物はブルーの色、北朝鮮側の建物は銀色であった。その 1 棟に会談場所があり緊張して中に入った。建物の真ん中を境に北側と南側の代表が座り、必要な時に会談を行うとの事であった。机の真ん中を境界線が走り建物の外わずか約 30 センチの敷石が、北と南の境を示していると説明を受けた。この建物の内部ではあったが北朝鮮側にも足を踏み入れてみた。

板門店の敷地内には「自由の家」があり、様々な南北会談や交流など、南北間の連絡業務を行っているとの事であった。もう一ヶ所「平和の家」というのがあり、韓国

と北朝鮮の総理が会談を行う場所として建てたとの事であったが、現在は南北間の軍事会談を除いた民間ベースの会談が開かれているとの事であった。

帰り際、バスを装甲車が護衛して北朝鮮側と最初の休戦会談が行われた板門店を見ることができるUN側の警備棟に案内された。砲弾が届く距離である。一番緊張したところでもある。目の前に北朝鮮側の見張り棟があり地雷が埋まっているとも聞く。

左手に目を移すと川に橋がかかっていた。「帰らざる橋」と名づけられている。1953年7月27日の休戦協定の締結後、戦争の捕虜交換がここで行われ、一旦北側と南側方向のどちらかを決めると、二度と帰ることが出来なくなることからこの名前がつけられたという。さらに左に目を移すと大きな北朝鮮の国旗がはためいているのが見える。「気静洞（キチョンドン）村」である。この村は非武装地帯の北側にあり、北朝鮮の宣伝村で北朝鮮の偵察兵士以外の民間人は誰も住んでいないとのことであった。特に村入口には高さ160メートルの世界最大の掲揚台が立っている。北朝鮮を誇張するための象徴かもしれないが…、装甲車に護衛され「帰らざる橋」の近くを通り、板門店を後にした。

途中、非武装地帯の南側に「大成洞（デソドン）村」が見える。ここには韓国旗の掲揚台があるが、北朝鮮に比較するとずうっと小さい。ここは「自由の村」と呼ばれ韓国側にあり戦争以前から農業を営み生活していた住民の村であり、農作業の時は護衛付で仕事をしているとガイドから説明を受けた。

ソウルから板門店に向かう途中、一人の外国人観光客として周りの景色を見ながらの旅行気分であったことは事実であった。ソウル市内の板門店へ向かう専用のバスターミナルからバスは定刻通り走り始め、専門のバスガイドは流暢な日本語で朝鮮戦争と板門店の歴史等を話し始めた。耳を傾け聞き入っていたが20分も走ったであろうか？左手に北朝鮮からソウルに流れ込む最大の川『漢江』が見えた。かなり大きな川である。この川沿いにさらに30分ほど北上すると『臨津江』（イムジン川）と合流する地点に到達する。この川の真ん中が軍事分界点である。この前後から川沿いに鉄条網と約30～50メートル置きに見張り小屋が並ぶ。北からの侵入者を防ぐことと、監視する為のものであろうか？次第に緊張してくる自分がわかる。

さらにバスは30分ほどで南側の最北端の『都羅山駅』に着く。休戦以前は当然北側へも線路はつながっていた。近くの臨津閣で、1953年7月27日休戦協定締結後12,773名の捕虜がその橋を渡り、自由の身になったことからつけられたと言う「自由の橋」を見学し、リビ橋の上にある検問所で検問を受け、パスポート確認と服装をチェックされ、バスは防壁を右に左に砲弾を避けるようにして、キャンプボニバス（韓国軍の管轄地域で唯一13カ国によるUN軍が担当している）に到着した。ここで我々訪問者（見学者）は宣言書なる物にサインをさせられた。中身は、我々は国連軍のゲストであること。敵の行動（活動）によっては危害を受けたり、または死亡す

る可能性があること。敵の行う行動に対して、訪問者の如何なる安全も責任も保障できないことを認めるという非常に厳しい内容であった。ここでバスを乗り換え軍人が同行のうえ非武装地帯を通り板門店に向かったのである。キャンプボニバスを出るときは入り口でピストルに実弾を装着し、キャンプに戻ってくるときは実弾を抜くという物々しさであった。

非武装地帯は 1953 年 7 月 27 日の休戦協定に従って設置されたもので、軍事分界線としては西から東にかけておよそ 24.8 キロメートル（155 マイル）北緯 38 度線の近くを北と南に 2 分しているのであるが、非武装地帯はその分界線から南北に 2 キロメートルずつ、武装なしにあらゆる軍事行為及び敵対行為を一切中止する地帯として作られ、およそ 6400 万坪に至る広大な区域となっているのである。

軍事分界線を境界にして南北側では 100 万名に近い軍隊が、今でも常時 24 時間体制で銃を構えて待機している。これが朝鮮半島の現実である。同一民族が朝鮮戦争を契機に半世紀以上にわたり分断の痛みを持ち続け、7 千万人以上の朝鮮民族が平和的な統一を願って止まないのは分かる気がする。

かつて敗戦国であった日本も第二次世界大戦後 4 つの国に分断されそうになったことが思い起こされる。今日、世界のあちらこちらで戦争が絶えない。戦争は悲惨を生む。人民と世界の平和を常に願って止まない。

長文になってしまったが、読者に感謝してここで筆を置くことにしたい。

2003 年 12 月 25 日記 S.Saitoh